

靈泉引客是瓦煤。旅館連檐倚水隈。幾道瀾
谿雲裡去。一村經濟地中來。除思詩外閑無
事。已畢浴。又時喚杯寄跡山林知幾日。官情
世味冷將灰。

又曰 任意抒寫逸情橫生第四句特絕

五月廿五日與硯友會諸子會於吉

田君寓居席上作 笠間園梧

笑我塵關未了緣。乘閑一日聳詩肩。人言富
貴已無地。自喜吟歌別有天。當戶殘花紅委
雨。繞園新樹綠如烟。世間万事空經過。欲把
風流樂暮年。

山田雲帆云 前聯自安之意隱然見于筆墨之間

吊亡友山本生 硯友會員 淺川雄太郎

中夕懷君泣不眠。蒼天何意似情偏。看花亦
有濺花淚。對月猶無觀月緣。松籟空聞龍岳
麓。水聲遙咽白川邊。孤心半夜蕭々雨。魂徹

幽冥到九泉

梧園先生云 悲哀情備至

柳 全 全

枝寫細腰葉畫眉。長々短々綠如糸。柔情自
在無言裏。徐弄春風招燕兒。

尼法師 (承前) 晚霞仙

春雨の 降をばなどて怨むらん

老い果てぬれば人も亦 嵐の花と諸共に

散なんものを假の世の 墓なきとを悟りつゝモ

藻盤の烟石左 風のまに／＼迷ふごと

只かりそめの慾に靡き 長からぬ世に道をしも

徳を破りつゝあぢきなき 浮世の罪を作ること

實にや悲しきうぎりなき

かくやど獨り觀すれば 富貴もたゞに風を待つ

燈火に／＼も異ならず 双びが岡の木下蔭

浮世の塵を迷ひ出で 朽ち果てぬ名を後の世に

殘さんどぞ望ましきと 仇し心に使はるゝ
人を教へし聖ころ 實に尊くも床しかりけれ

須摩の浦

雪ふり積みし夕月夜

沖の千鳥の聲さびて

磯山嵐烈しきに

主の尼は戸をまめつ

爐に眞柴おりろへて

彼方の尼の身の上的

話を暫ま打聞ぬ

數ふれば

はや二十年の昔まな

樂しきことも幸ならず

苦しきとも罪にあらざ

只行水に身を任せ

月よ雲花に嵐は厭はねど

野路の千草の霜かれて

松吹く風も烈まきに

何とてわなみ只一人

世のうきものなからざらぬや

今は早や問はれずも

語らまほしき身の素性

思へば吉田の宰相と

世に時めきし其人は

妾の父にてありけるよ

やごさき身に生れ出で

月と花とにめでられつ

樂しく世をば送りしが

一歳春の暮つ方

散り行く花と諸共に

父は此世をふりすてゝ

戀しきものをふり捨て

あの世の人と成にたる 樂しきとを知りし日に
 苦しきとを知りそめぬ ノウ聞き玉へ尼御前
 時は平治の末つ方 平の族時を得て
 いとも盛りの折なりま 其族にしあらざらば
 人にもあらずさいなまる 思ひぞ出る九重の
 奈良の都の初めより 世々を流れし藤波も
 今はや絶えん花房の 凋む姿ぞ哀れける
 すむもうま すまぬもつらき浮世哉
 今は都もわびしくて 三輪にはあらぬ一本の
 母上君を力とし 嵯峨野の奥の片ほとり
 賤が伏屋にちかぶれて 僅に其日送りにし
 悲まき時はかく迄も 身にうきとの積るらん
 母は病ふし柴の 床にも長く伏しあへず
 秋の夕の木の葉ちる 夕暮告る鐘共に
 遂に見まか玉ひにき 幼な心は父よりも
 深くたのめし母上に ふり捨てられついでまほ
 悲しきとぞいかなりし 共になれにし起ふしも
 今は昔の夢となり 只ろれをのミ朝夕に

思ふにつけて胸迫り

小供心は白糸の

妾も月日過る内

余念もなげに遊べども

見るにつけてもいさどきほ

身にまひとつど多うりさ

ある夕暮のことなりし

暫しの宿を頼まんと

其歸るさに立よりま

武藏の守れ知盛卿

妾のあまけなきをもて

只其折は幼なくて

今に思へば是ぞこれ

なげきの海に沈めてし

神ならぬ身の露ばかり

斯く迄も

源氏の族昨日迄

其名もへにをわりする

涙のかわく隙もなし

染られ易きものと云ふ

晝は木陰に友どちと

夜はなき母の床の内

涙に曉の鐘の音

かくうき年を送る内

一村雨の烈しきに

日ねもすなし、狩倉の

人は君にも知ろしめす

妾のたのみなきをき

いと妾をめでられぬ

ゆたけきを頼みしが

長き妾の行末を

其初めにしありけるが

知らざりし、こゑみなりけれ

浮世はめぐるものなるか

東の空に漂ひて

海の藻屑とさへにしが

平の族今日は早や

波に浮ぶぞ哀れるなる

世の取沙汰を聞につけ

妾れつまで定めてし

一の谷の戦ひに

浦の藻屑となりなきと

我もあふで嘆きしが

盡しとを勇々しくも

其なき跡を後の世に

浮世をよるに尼の身と

此浦の邊に住ひ來ぬ

同じ族の人々の

住なんどぞひたすに

涙の内に語りたる

磯打波もほのかにて

* * * * *

思ひ見る

僅か三よさに宿をかへ

都を跡に西の海

妾都に留りて

いと胸のみ迫りけり

武藏の守の知章

又知盛の身にかわり

聞よりいと一度は

世に武士の道をしも

思ひなほえて此の如く

吊はんとて髪を切り

なりつゝ人も須廣の浦

今よ共此庵に

後世の爲に尼御前と

只己れのねぎ事と

折りしも遠く雁なきて

月影清く戸を照す

* * * * *

鎌倉山も照る月も

跡を吊ふ人もなし

平の族亡びては 都も遠き津の國れ
 田舎の浦邊に尼法師 朝な夕なに閑伽あかをくみ
 佛に仕へ申しつゝ 春の朝に秋の夕
 鐘の音幽かにすミ渡り 見目かるてう海士人も
 起伏し心に聞き居ける 響ぞいどい殊勝ありける
 (完)

雜報

○學校長の上京 中川學校長には本月下旬より文部省に於て開かれし中學校長會議に臨む爲め本月十二日を以て上京せられたり來月十日に行はるゝ本校卒業式までは多分歸校さるべし

○再び訓示 あり曰く

學校所定ノ諸規則ヲ遵守セシムルハ當ニ學校ノ紀律ヲ正シクスルノミナラス生徒ヲ養成スルニ於テ必要欠クヘカラサルヲ以テナリ然ルニ近來無個欠席ヲ爲ス者往々有之趣不都合ノ次第ニ付自今是等ノ者アルトキハ嚴重ノ處分可行候條不心得之儀無之様注意スヘシ
 右訓示ス

明治廿六年六月十二日

中川學校長

既往は復た追ふ可うらず一たび此訓示に接す自今當さに惕然自警すべき也

○各部記事

●弓術部 去去十四日午后三時より月次競射の催あり出席者二十名小林部長櫻井教授余田教務等臨席あり五對的中の數に準して席次を定めしが伊藤龍吉氏第一席(中七分) 小山安吉氏第二席(中六分) 安河内麻吉第三席(中六分)を占めたり此日霖雨新霽輕風徐ろに來り弦響き箭鳴り觀者も心胸の